

松毬に生えるキノコは妖怪だ！

萩本 宏

松毬に生えるキノコは、わが国ではマツカサキノコ、マツカサシメジ、マツカサキノコモドキ、ニセマツカサシメジ、マツカサタケの5種類が知られているようですが、私が関わっているのはマツカサキノコモドキ、ニセマツカサシメジ、マツカサタケの3種類と数年前に見つけた後記の2種類を合わせた5種類です。今回はこの中の、主にマツカサキノコモドキとニセマツカサシメジの子実体の発生と成長について、研究（遊興？）中に遭遇した妖怪を紹介します。

人は大昔からキノコを変な生き物と見なす

妖怪という言葉は、世間では「現実には存在しない異形の生物や物体で、不特定の人の前に出現するもの（幽霊との違い）」と受け取られ、それによって起こされる現象を妖怪現象と言われたりもしていますが、小松和彦氏が『妖怪文化入門』（せりか書房、2006）で妖怪を3種類に分類し、定義しています。即ち、出来事もしくは現象としての妖怪（現象 - 妖怪）、超自然的存在としての妖怪（存在 - 妖怪）、造形化された妖怪（造形 - 妖怪）です。更に、妖怪は村とか地域の集団全体が体験を共有することが必要なようです。

キノコはその発生から成長、崩壊まで、神出鬼没、変幻自在、美しくもあり、可愛くもあり、可笑しくもあり、奇妙でもあり、気味悪く、怖ろしくもあります。それでいて昔から貴重な食べ物であったというのは、他に例を見ない生き物です。人々は大昔からキノコを変な生き物と思っていたことでしょう。20

世紀初頭に始まる第1次妖怪ブームの中でキノコが妖怪として登場するのはこのような人々のキノコに対する感情の表出にほかなりません。

翻って私が松毬に生えるキノコを妖怪と言うのは、キノコという生き物が人々に与えるイメージを下敷きにして、更に松毬に生えるキノコの研究で遭遇したイメージが重ね合わさって強勢され、私に憑いているからです。

他方、キノコはそれぞれの^{サガ}性に従って環境条件や私の下手な実験操作に正直に応答しているだけです。従って、科学的観点からは私の無知を曝け出しているお粗末さは十分に自覚しています。しかし、菌楽や菌遊学などというものは、キノコという妖怪に魅せられるからこそやれることです。私は、千葉菌類談話会の会員の皆さは、意識される、されないにしろキノコの妖怪に深く憑かれておられるに違いなく、皆さんは「茸憑き」だと確信しています。

私が魅了されたマツカサツエタケは新図鑑からは跡形もなく消えた

前置きがとても長くなりましたが、私は、大学3年生、1955年の秋に理学部の附属植物園でアカマツの松毬に生えるキノコを見つけ出版されたばかりの川村清一先生の『原色日本菌類図鑑』（1954～1955）を参照し、マツカサツエタケと同定しました。一目見てこのキノコに魅了され、憑依されました。そして、松毬に生えるキノコを木材腐朽菌であるエノ

キタケやヒラタケと同列に考えて「培地に松毬の抽出物を添加し、低温処理さえすれば子実体ができるだろうから、そうすれば一瀉千里に物質の抽出と同定だ。この子実体形成物質をマツタケの菌糸に与えればマツタケを試験管の中で発生させるのも夢でない。これで勝負は決まり」とまったく浅はかな考えでこのキノコの研究に取り組みました。このようなことが易々とできれば大学を卒業する前に博士になってしまいます。

卒業した年の秋に今関六也・本郷次雄『原色日本菌類図鑑』(1957. 11. 10) が出版されました。この図鑑ではマツカサツエタケは跡形もなく消えてなくなり、マツカサキノコモドキとニセマツカサシメジという全く別の2種類のキノコに化けていました。まるで**分類の妖怪**に出逢った気分でした。図鑑を手にしたのは11月26日で、松毬に生えるキノコの最盛期ですが、園丁が植物園内を掃除して松毬を全部捨ててしまっていたので、キノコを観察することはできませんでした。それから44年間はこれらのキノコとは疎遠のままでした。その間、マツカサタケの純粋培養での傘形成の研究を1年間ほど副テーマ的に行いましたが、英国のCardiff大学のR. Harvey (1958)に先を越されてやめました。

退職後、44年ぶりに松毬に生えるキノコの研究を再開

会社ではキノコとは全然関係のない仕事をしていましたが、2000年6月に退任してその翌年の11月から松毬に生えるキノコの研究を44年ぶりに再開しました。それ以来、既に9年余になりますが、未だに化かされ続けています。なんとか化かされたふりをして化かしてやろうと思って頑張っていますが、なかなか思い通りにはなりません。マツカサキノコモドキやニセマツカサシメジが生えた松毬を土中に埋めると、翌年にはしばしば種類が逆転して生えてきます(写真1)。松毬をフ

ードパックに入れて低温処理しても同じことが起こりました(写真2)。

私はこの事態に同定能力が欠如しているのではないかと慄きました。更に、*Mycena* sp. (写真3)や*Podostroma* sp. (写真4)までも発生します。**発生**の妖怪のお出ましです。最初は松毬から生えているとは知らずに引き抜いていましたが、この2種類がいつも松毬を埋めた位置の真上に出るので不思議に思って松毬を掘り起こしてみても分かったことです。京都御苑の中でこの2種類を探したところ、前者は極めて稀に、後者は比較的高い頻度で見つけることができました。これら2種類の属名は京都の高名なアマチュアのキノコ研究者小寺祐三氏から教えていただきました。

また、1つの松毬に2種類以上のキノコが発生することも珍しくありません(写真5)。このことは、前記の今関・本郷図鑑のニセマツカサシメジの項に「マツカサキノコモドキと同時期に発生し、時には同一マツカサから両者が出ていることもある。」と注記してあります。要するに、松毬には様々な種類の菌類が生活していて、その年、或はその時々々の環境条件に適した種類のキノコが生えると解釈すれば容易に説明がつけます。

ところが、松毬にこれらのキノコの胞子を大量に接種しても、その胞子のキノコは生えず、他の種類が生えてくるのが間々あって悩まされています。私の家では松毬に生える5種類のキノコの胞子が飛びかっている可能性は否定できませんが、松毬の上にマツカサキノコモドキ1個分のきれいな胞子紋を描かせても、このキノコは生えずにニセマツカサシメジやマツカサタケ、それに御苑でも滅多に見られない*Mycena* sp. が生えてくるのですから愕然とします。しかし、流石に純粋培養では接種した種類しか生えてきません(写真6)。

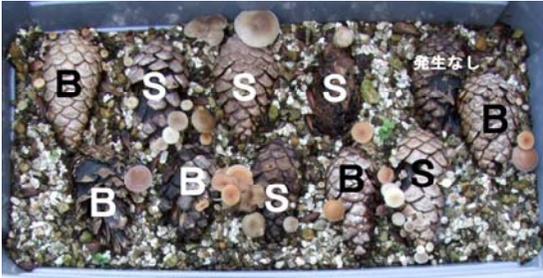


写真1 マツカサキノコモドキが発生した松穂(後列の5個)から翌年に発生したキノコとニセマツカサシメジが発生した松穂(前列の5個)から翌年発生したキノコ(記号S:マツカサキノコモドキ発生松穂、記号B:ニセマツカサシメジ発生松穂)



写真4 自宅のプランター内で発生した *Podostroma* sp.



写真2 前年にマツカサキノコモドキが発生した松穂をフードパックに詰めて低温処理して発生したマツカサキノコモドキとニセマツカサシメジ(記号Bはニセマツカサシメジ発生松穂、無記号はマツカサキノコモドキ発生松穂)

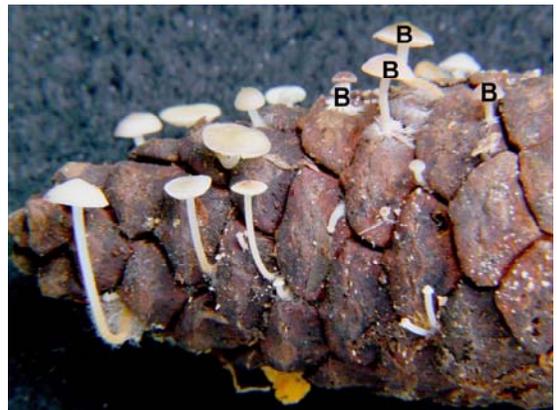


写真5 マツカサキノコモドキ(記号なし)とニセマツカサシメジ(記号B)の両方が発生した松穂(白色の多数の斑点はニセマツカサシメジの原基)



写真3 自宅のプランター内で発生した *Mycena* sp.



写真6 純粋培養で発生したマツカサキノコモドキ(左)とニセマツカサシメジ



写真7 純粋培養で松毬に発生したヒラタケ



写真8 純粋培養で松毬に発生したエノキタケ



写真9 ヒラタケの純粋培養中にどこからか忍び込んだマツカサキノコモドキ

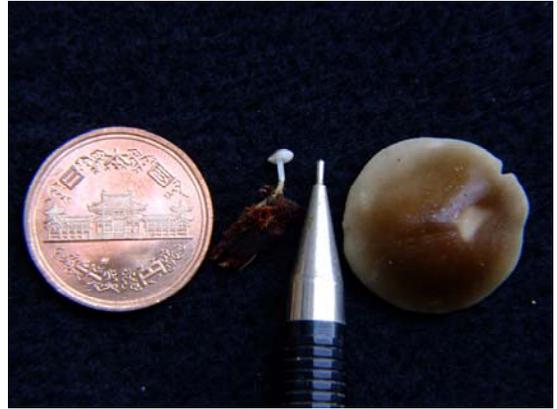


写真10 マツカサキノコモドキの極端に小さな傘(左)と極端に大きな傘(右)と比較のための10円硬貨とシャープペンの先

松毬にはヒラタケやエノキタケが簡単に生える

ヒラタケ(写真7)やエノキタケ(写真8)はまさか松毬には生えないだろうと思って松毬を培地にして純粋培養したところ、どちらもマツカサキノコモドキやニセマツカサシメジよりもずっと簡単に生えました。それどころか、ヒラタケが生えなくなったので、培地が乾燥したからだろうと思って滅菌水を注いで1年ほどすると松毬の表面に菌糸が繁茂し、立派なマツカサキノコモドキが生えてきたのには仰天しました(写真9)。滅菌水を注入する数秒の間に孢子が飛び込んだとしか思えないのですが、大量の孢子や寒天培養した菌糸を接種しても容易に生えないマツカサキノコモドキが易々と生えるのですからキノコに嘲れているような気がしました。

マツカサキノコモドキもニセマツカサシメジもキノコの大きさには、著しい差異があります(写真10)。培養条件で形も大きく変わります。この成長の妖怪は、環境応答の結果です。好条件では大きく育って沢山の孢子を作り、悪条件では極小のキノコを作ってなにがなんでも子孫を残す作戦のようです。マツカサキノコモドキもニセマツカサシメジがどのように成長するかは、松毬の置かれた位

置とキノコの発生位置と土壌の三者の位置関係が大いに関わっています。しかし、土壌は松毬を留め置き、水分を補給し、マツカサキノコモドキにあっては柄を支える物理的存在でしかないそうです。もし松毬が雨雲の中を2~3年間飛び回るようにできれば、キノコが生えてくるはずです。空飛ぶキノコです！その形は、多分光りが届かないために傘の発達しない妖怪的な形でしょう（写真11）。

松毬を一つの生態系として生物相互の関係を調べると面白そう

松毬には前記の5種類のキノコやその他の菌類を含む微生物、トビムシ、センチュウ、ダニ、シロアリなどが生活しています。これらの生物はいつの時代に何故、何処から松毬にやってきたのでしょうか。また、これらの生物はどのように松毬の場所や栄養を分け合っているのでしょうか。松毬を一つの生態系として生物相互の関係を調べると面白そうです。さらに、松毬に生える5種類のキノコはすべて別属であるにも拘らず、松毬に依存して生きているということは機能的（生理・生化学的）な収斂現象と言えますが、それが何なのか興味は尽きません。しかし、日用品・台所用品を活用しての研究は遅々として進みません。妖怪キノコを半ば楽しみ、半ば悩まされていますが、「キノコ憑き」からいつになればキノコが逃げて行くのかは私には分かりません。ひょっとするとこのキノコ達は『遠野物語』のザシキワラシかもしれません。私を京都御苑の野外調査に駆り立てて運動の機会を与え、しょうもない原稿を書かせて呆けないように大脳を刺戟してくれているような気がします。

私は「松ぼっくり」は嫌いです

最後に、松毬に生えるキノコを研究していると云いますと、多くの人が何故か「松ぼっくりに生えるキノコですか」と「松毬」を「松



写真11 完全暗黒中で発生したマツカサキノコモドキ（マツカサキノコモドキの胞子の着いた松毬を、2~3年間雨雲の中を遊泳させたら、このようなキノコが生えるはず）

ぼっくり」に替えて問い返します。しかし、私は「松ぼっくり」は嫌いです。アカマツ（女松）もひどく怒っていることでしょう。その理由は、次の珍問答をお読みいただければ分かります。

松雄 「松毬の別称は松ぼっくりや。ぼっくりの語源はふぐりや。ふぐりに生える茸とは、日本では松茸、西洋では鼈茸や」

茸子 「え！、そんなキノコが本当にスグリに生えるの？」

松雄 「あんたほんまにアホやな」

Phallus 神 「アホは松雄君や。賢いのは蒲魚茸子さん」

Vulva 神 「女はやっぱり妖怪よ！キノコに *Phallus* 属があつて *Vulva* 属がないなんて生物界の不条理よ。是非、*Vulva impudicus* と命名できる新種を発見してよ！これは今年の千葉菌類談話会の第一目標よ」

この記事は、2011年1月22日に千葉県立中央博物館で開催された第19回スライド会の内容を一部修正して投稿したものです。